

カガヤキ

No.48(2019.8.15 刊行)、広報委員会編集

県立図書館発行

禁複写転載©広報委員会

特集 図書館の今と昔

桜井 淳

(広報ボランティア)

羽石康弘

(県立図書館普及課)

はじめに

一般論として、現在の図書館機能は、優れている。歴史的に見て、飛躍の大きな要因のひとつは、1970年代から、社会に急速に普及したコンピュータの利用にある。

書籍の基本情報(表題、内容要旨、著者紹介、貸し出し状況、分野別分類書架名、書籍識別記号など)は、「データベース化」され、そのファイルをコンピュータ検索すれば、目的とする書籍の情報が、一瞬にして、分かる。

1960年代には、「目的とする書籍を手にするまで、半日も要した」(原研研究者への聞き取り調査より)が、いまでは、わずか、数分で、手にすることができる。

そのみならず、県内のすべての図書

館が、「コンピュータネットワーク化」され、目的とする書籍が、どこの図書館に所蔵されているか、分かる。県内図書館の貸借制度により、手続きすれば、どこの図書館からも入手可能である。

図書館が的確に機能するか否かのひとつの要因は書籍の管理が適切になされているか否かにある。

そこで、県立図書館の書籍の流れを的確に把握するため、職員による作業内容(新刊購入、書籍識別記号ラベル貼り、「タトルテープ(Tattle Tape)」装着、貸し出し、返却、配架(返却書籍の約90%担当))の現場を調査した。あわせて、資料配架ボランティアグループの配架作業(19人、毎週作業しているのは、2-3人、毎回、作業時間約30分、返却書籍の約10%担当)の現場も調査した。

書籍識別記号と分野別書架

新刊書籍は県立図書館に設置されている新刊図書選定委員会(県立図書館館長、各課長、分野別専門家数名)で決定される。新刊の書籍識別記号ラベル貼りや「タトルテープ」装着などの作業は情報資料課が担当している。書籍の貸し出し・返却処理・配架などの作業は、館内サービス課が担当している。書籍は分野別書架(総記、哲学、歴史、社会科学、自然科学、工学技術、産業、美術芸術、言語、文学、郷土資料、児童図書・紙芝居・絵本)に配架される。

書籍に装着される「タトルテープ」(磁気情報が書き込める非常に薄い金属フォイル、横幅約2mm、縦幅は各書籍の縦

幅)とは、書籍盗難防止策として、書籍に貼りつけられている。

県立図書館の出入口付近には、BDS (Book Detection System、磁気量ではなく、磁気特性で判定)が設置されている。「タトルテープ」の情報を読み取り、適切に貸し出し手続きをした書籍か否かを判定し、不正持ち出しであれば、アラームを発報するように設定されている。



哲学分野書架



BDS(Book Detection System、磁気量ではなく、磁気特性で判定)



書籍識別記号ラベル(書架の中のどの位置か分かる)

貸し出しから返却処理まで

利用者は、県立図書館利用カード(磁気カード)を添えて、目的とする書籍を総合受付カウンターに差し出す。館内サービス課の担当者は、着磁装置を利用し、「タトルテープ」に磁気情報を書き込む(担当者は磁気装置の上に書籍の背表紙を当て、前後に、数回、擦ることにより、着磁)。利用者は、その書籍を受け取り、BDSを通過する。

夜間書籍返却口と総合受付カウンターに返却された書籍は、まず、「タトルテープ」の磁気情報が消去され(消磁装置で消磁)、移動用台車に乗せられ、分野別書架に配架される。返却された書籍は、書架の最下段や最上段などに戻されるた



専門分野別書架案内

め、踏み台に乗り、バランスを維持するなど、予想以上の肉体労働になる(利用者は、目的の書籍を選択する際、同様の経験をしている)。

な割合を担える手法はないものか、考えさせられた。



総合受付カウンター



着磁装置(書籍の背表紙部分を台に載せて左右に数回こする)

資料配架ボランティアへの聞き取り調査

事前調査から分かったことは、配架作業の約90%は、県立図書館の職員が担っており、ボランティアの分担割合は、約10%である。

その原因は、夜間返却図書などを含め、開館直後までにそれらの返却図書を配架しておかなければならず、職員が担わざるをえないためである。

ボランティアは、毎週午後2-3人が30分間、作業を実施しているものの、より大き

編集後記

通信紙の取材のため、2019年6月25日、県立図書館の開館時刻の少し前に到着したところ、すでに、数名が列をなしていました。

入館すると、二階に上がる階段のすぐ近くに、山口修館長がいたため、軽く会釈して通り過ぎ、しばらくして振り向くと、右手にゴミ袋、左手に白いビニール袋を持ち、近くのゴミを拾っていました。そのような光景は、ボランティアの約4年間に、初めて見ました。

山口館長が、率先して、そのようなことをすることは、小さなことですが、組織の規律や倫理を高めるため、大きな意味を持ちます。大変、良い光景に遭遇しました。

私も「かくあるべき」と心を洗われました。

取材過程をとおし、多くの方々に会い、多くのことを学びました。神に感謝。

桜井 淳

【補足1】桜井淳編集担当通信紙

CY	No	HP掲載	備考
H27	25	○	再発行優先版 H27年度年次報告
H27	26	○	再発行優先版 H27年度全体会 合報告
H27	27	○	モデル版 ボランティア論

H27	28		テスト版
H27	29		テスト版
H28	30	○	モデル版 ボランティア論
H28	31	○	モデル版 投稿規定作成 編集裁量範囲 掲載までの経緯
H28	32	作成中	ボランティア詳細データ収集中 特性分析 (多変数解析含む)
H28	33	○	モデル版 通信紙位置づけ
H28	34	手続中	モデル版 図書館論 ボランティア論
H29	35		テスト版
H29	36	手続中	モデル版 ボランティア論
H29	37	手続中	モデル版 ボランティア論
H29	38	○	モデル版 火災避難訓練実施報告
H30	39	○	モデル版 H29年度年次報告
H30	40	○	モデル版 県立図書館現状 ボランティア論 未来図書館論
H30	41	○	モデル版 H30年度ボランティア研修会実施報告

H30	42	○	モデル版 特集上條哲追悼
H31	43	○	モデル版 H30 年度年次報告
R01	44	○	モデル版 ボランティア現場訪問 1
R01	45	○	モデル版 ボランティア現場訪問 2
R01	46		モデル版 新館長への聞き取り調査
R01	47	○	モデル版 ボランティア現場訪問 3
R01	48	○	モデル版 ボランティア現場訪問 4
R01	49	企画中	モデル版 ボランティア論

注 1) 「再発行優先版」とは内容より再発行優先。

注 2) 「モデル版」とは標準化できる良い内容。

注 3) 「テスト版」とは意見を聞くための試験版。

注 4) 社会科学的手法による分析実施中。

注 5) 二大テーマは「各ボランティアグループ活動年次報告」と「ボランティア論」。

【補足 2】桜井淳「ボランティア特性分析」

県立図書館ボランティア(広報グループ)になってから 5 年間弱、以下のようなことを調査・検討しました。

これまでの茨城県立図書館による配布資

料や独自調査の社会科学的分析に拠れば、茨城県立図書館ボランティアには、「20%の経験則」と言うものが存在することに気づきました。

具体的には、

- ・アンケート回答率14%(通信紙No.6)、
 - ・研修会過去平均出席率約20%、
 - ・全体会合過去平均出席率約20%、
 - ・通信紙(No.1-24)のレベルは100点満点で20点、すなわち、20%、
 - ・通信紙(No.1-24)の過去読者率約20%(135人中30人弱)、
- です。

上記の数字は、決して、悪くなく、日本中、どこの組織のボランティアでも、みな、同じような傾向を示していると思います。その原因は、ボランティアの活動目的にあり、都合のよい時間のみ、うまく利用して、貢献することにあります。無理してまでも、形式的に、数字を上げる必要はありません。

独自調査に拠れば、ボランティアについて、

- ・年齢別人数分布は日本の人口の年齢別人数分布の形に近い(50-60歳台にピーク)、
- ・年齢別貢献度(貢献度とチェック名簿の個人別チェック回数)の間に、プラスの相関関係があることに着目)は、日本の人口の年齢別人数分布の形に近く(50-60歳台にピーク)、特に、高齢者の貢献度が高いわけではない(これまでの認識とは異なる意外な結果)、
- ・県立図書館ボランティアの継続年数分析(県立図書館の協力を得て実施中)、となります。

改善した通信紙(No.25以降)は、レベル

70点(目標80点)、読者率40%(目標60%)に引き上げました。

数字を上げるために、非常に大きな労力を注ぎ込まなければなりませんでした。

県立図書館によるボランティアの15年間の特性データが、保存されておらず(法令では、保存期間は、3年間)、図書館とボランティアの双方にとって、社会科学的分析に生かされたとは言いがたい。理想的には、3年ごとに、データ分析を実施した方が良いでしょう。

広報グループは、シンクタンク機能を有しており、ボランティアにかかわるデータの社会科学的分析を実施しています。

【補足3】桜井淳「各ボランティアグループへの分析視点」

広報グループは、過去5年間弱、以下のようなことも調査・検討しました(2019年度の現状)。

- 1) 資料配架グループ(吉田善克)
- 2) 三の丸書庫グループ(黒沢英宣)
- 3) 図書修理グループ(近藤淑子)
- 4) 外国語資料整理グループ(荒木睦)
 - ・3)の作業内容把握(図書修理業者との比較論)。
 - ・4)は考察型記事化困難。
 - ・1)-3)については通信紙No.25, 44, 45, 48参照。
- 5) 郷土資料整理グループ(今泉友美)
 - ・考察型記事化困難。
 - ・通信紙No.25と27参照。
- 6) 録音図書製作グループ(立川みつよ)
 - ・考察型記事化困難。
 - ・分野40-50%は文学作品(文字だけで、図

表がないために表現しやすい)。

- ・媒体 テープからCDへ移行。
- 7) 対面朗読グループ(人見佳子)
 - ・考察型記事化困難。
 - ・対象者と1対1で、視覚障害者などへ朗読(文学書なら分かりやすいが、専門書になるとその分野の専門家でないと正確に表現できない)。
 - ・県立図書館での年度別実施件数(年齢別人数)はどのくらいか?
 - ・心理学や専門分野の知識の有無。
 - ・通信紙No.25, 39, 43参照。
 - 8) 児童サービスグループ(大岡智子)
 - ・絵本や紙芝居。
 - ・主に2-3歳児。
 - ・児童サービスグループ55人が分担して作業(ボランティアの半数からなる最大グループ、貢献度も高い)。
 - ・通信紙No.25, 39, 43, 47参照。
 - 9) 広報グループ(桜井淳)
 - ・新方針で編集した通信紙No.25以降において、グループとしての考え方や作業内容を記してきました(No.31, 33)。
 - 10) 特技グループ(なし)
 - ・活動休止。

ボランティアの総合的な課題としては、「年次報告」(通信紙 No.25, 39, 43 参照)のまとめ方に工夫を要すること(メモや箇条書き程度であり、投稿規定に則った文章になっていない)、「ボランティア論(「ボランティア活動で得られた諸々のことについて人材養成のために後輩に伝えたいことのまとめ」の略)」(良い例は、No.30, 40 参照)のまとめができないことです(これまで、すべてのグループに原稿執筆依頼を行

いましたが、提出者は、ゼロでした)。課題は、積極的に、克服せねばなりません。

【補足 4】桜井淳「社会科学的聞き取り調査手法」

社会科学の研究手法のひとつに「調査的面接法」があります。普通は「聞き取り調査法」と略されます。



ナカニシヤ出版(1998)、第8章「調査的面接法」

「聞き取り調査法」には、構造化面接(structured interview)と非構造化面接(non-structured interview)があります。構造化面接は、標準化面接(standardized interview)、または、能動的面接(active interview)、一方、非構造化面接は、非標準化面接(non-standardized interview)、または、受動的面接(passive interview)と呼ばれることもあります。

通信紙の取材では構造化面接を実施しました。この手法の特徴は、①異なる事例を対象に、一定の測定法によって、一群の変数を導き出せること、②信頼性の高さか保てること、③質問者の言葉遣いの違いによって生じる問題を回避できることです。

「聞き取り調査」の数は、学部卒論の場合には、数人、大学院修士論文では、十数人、同博士論文では、二十数人に対して実施すると言われていています(東大大学院総合文化研究科ゼミでの指導教官コメント)。通信紙の取材では、少ない場合でも、2-3人、多い場合、10人くらいでした。

通信紙の取材では、少なくとも2-3人、多い場合には10人弱です。

福島原発事故では、各事故調は、「聞き取り調査」に拠り、事実関係の確認と問題点の把握に努めましたが、各事故調とも、少ない場合でも数百人、多い場合には、千数百人を対象にしました。それは、普通でなく、歴史的出来事です。

通信紙の取材では、社会科学的研究手法の「聞き取り調査」が実施されており、信頼性を担保できる取材対象を選択しています。